

信毎 86.8.16

第三種郵便物認可

文革20年後の中国

中嶋 嶺雄
(上)

今からちょうど二十年前の夏、中国全土が紅衛兵運動の紅々烈々たる熱狂のなかに渦巻いていた。一九六六年八月五日、文化大革命の発動にちなして党中央委員会(十期八中全会)の合意を得られなかった毛沢東主席は、会場からぬけ出して、みずから「司令」を砲撃せよ」との大字報を貼(はり)り出し、紅衛兵大衆の決起を鼓吹した。こうして八月二十日には、「造反有主張の道を歩む突進派」の

そして、今から十年前の一九七六年の中国は、周恩来の死、天安門事件、毛沢東の死、北京政変(「四人組」逮捕)と激動が相次いだまさに歴史的な一年であった。ちょうど今頃は、唐山大地震がなかった吉な予感を与えるなかで、毛沢東がいよいよ天寿をまっとする直前にあった。もとよ

平その人は、「走資派(資本主義の道を歩む突進派)」のジャーナリズムから、「人類

な経緯や断面を明らかにすべく、そのすさまじい内幕が語られるはじめてである。最近では、月刊文学誌「中国」第四号のドキュメントが注目された。また、著名な作家・巴金は、「われわれの子孫に血の教訓を絶対的に忘れてもらいたくない」との理由で、文化大革命博物館の建設を先頃提案している。

かつて、わが国の知識人やジャーナリズムから、「人類

理」のスローガンをかけた紅衛兵の大群が北京の天安門広場に街頭進出して、全世界を驚かせたのであった。

その直後の同年初、私は初めてこの訪中として単身、文革の渦中に飛び込んでゆき、現地状況をつぶさに観察したのだが、あれから二十年、中国は大きく変貌(へんぼう)し、文革のドラマを悲劇的な「十年の動乱」としてようやく回顧し得るようになった。

汚名を冠せられて、天安門事件以降、あらゆる職務を剝奪(はくたつ)され、行方不明になっていたのである。

このような激動を体験した中国では、現在、文革の様々

史上の創舉(そうこ)だとか「現代史上の壮大なコミュニケーション」だとか称えられた文化大革命は、いまこうして、二度と繰り返してはならない負の遺産として刻印されつつあるのだが、では一体、文化大革命とは何であつたのか。

文化

毛沢東政治の極限形態 伝統体質の拒絶で失敗



「なかしま・みねお氏」
一九三六(昭和十一年)年松本市に生まれ、東京外語大中国科卒、東大大学院国際関係論課程修了。社会学博士。現職のほか、オーストラリア国立大、バリ政治学院客員教授なども兼任した。主な著書に「北京烈烈」「現代中国論」「中ソ対立と現代」「香港 移りゆく都市国家」などがある。

限形態だと主張してきた。そして、貧困のユートピアを求めた「毛沢東思想」の絶対化は、毛沢東家長体制のもとで、中国社会内部の自立的な発展の契機をあらゆる分野

追害による大量の死傷者をもたらした点だけにあつたのではない。一九四一(昭和十六)年から四五(昭和二十)年までのわが国の戦争中の四年に比べても歴然とする十年間という長期間、本来は重要な社会主義建設期であるべき革命後社会としての中国では、全社会的「兵營国家」化が進み、社会生活における私的領域と公的領域の無差別化、私生活そのものの政治化といった状況が支配し、アメリカの亡き女流政治学者ハンナ・アレントのいう「社会的なるもの」が完全に消失してしまつたのである。このような状況においては、全体主義国家にしばしばその前例を見たと、大衆の情緒をかきたて、大衆を組織する方法を知り得た指導者が全能になる。この点で毛沢東は類稀なる政治技術を有するカリスマ的指導者であつた。

だが、中国社会は、革命後の今日でも、依然として「社会的なるもの」がいまだところらに広がり、存在してきている地縁・血縁的な一種のヨコ社会としての伝統社会だとい

えよう。私はそれを「すきま」と定義づけているけれど、こうした中国社会を「毛沢東思想」によって埋めつくし、「すきま」を強権的に押しつぶそうとしたところに、毛沢東政治の無理があつたといわねばならない。こうした無理は、とつてい永続し得なかつたのであり、結局は、毛沢東その人が中国社会の伝統的体質に拒絶され、足をすくわれたのだといえよう。

それにしても、今日、「毛沢東思想」が全面的に批判され、文化大革命の精神と論理が完全に否定されたとはいへ、文革の十年のみならず、毛沢東政治の四半世紀が生み出した現実には、そう簡単に消滅できるものではない。人口問題一つをとつてみても、人間資本論、に基く毛沢東政治のツケは、いま、十一億になんたんとする過剰人口国家として、中国の近代化に

とつての根本的な性格(しつこく)になつてはいる。近代化にとつての不可欠の前提である教育、とくに高等教育の立ち遅れは、依然として文盲率が全人口の三十三パーセント前後にのぼるといふ現実とも

歳月を要するであらう。こうした現実において、いわゆる「開放」政策が、文革で引き裂かれた中国社会の傷を癒すいとまも導入されな結果、中国はいま新たな政治的・社会的な亀裂と矛盾に直面しているといわねばならない。毛沢東政治の代償は、決して中国の将来に重く深くのしかかっているのだ。

(東京外語大教授)

海外手帳

西ドイツのハンブルクで開かれた。第四十九回になる今回のテーマは「同時代文火を放らすことがない学」に現れた同時代史」であつた。

文文学の完全さに到達することはあり得ないでありま

ワイツゼッカー大統領が願つたのは、いつまでもな